

『無漏總中三』をめぐって

坂 本 廣 博

『無漏總中三』とは「摩訶止観」卷一上に出る、漸次止観を説明する一句であるが、古来よりその何をさすかについて異説の多いところである。以下各注釈書に注意しつつ、その意味するところを探ってみたい。

最初に「摩訶止観」の相当箇所をみるに、

漸次中六。善惡各三。無漏總中三。凡十二不_レ同。從_レ多_レ為_レ言。故名_三不定_一。此章同大乘同実相。同名_三止観_一。何故名_為弁差_一。然同而不同。不同而同。漸次中九不同。不定中四不同。總有_三十三不同_一。從_レ多_レ為_レ言故名_三不同_一耳。

とあり、湛然（711～782）の「輔行伝弘決」にこれを釈して、

言_三五重_一者。一_レ帰戒。二_レ禪定。三_レ無漏。四_レ慈悲。五_レ実相。義十三者。初番有_レ六。謂_三三惡三善_一。第三番四謂_二同教二乘_一。并前六義合_レ為_レ十也。余三不_レ開合_為十三_一。於_三十三中_一実相是所縁之境。望_レ頓是同不_レ応_三數_一為_三不同之限_一。故下問答中云。漸次中有_三十二不同_一。即此意也。

という。即ち無漏の中に四あり、それは両教（藏通）の二乘

を指すというのである。しかしながら、「止観」にいう十二不同と合わせるためか、一帰戒を三惡道、三善道の六、二禪定、三無漏を四、四慈悲、五実相の十三と数え、第五の実相は数えないという複雑な操作をするのである。

「止観」にもどって、漸次止観の説明をみるに、

漸初亦知_三実相_一。実相難_レ解漸次易_レ行。先修_三帰戒_一翻_レ邪向_レ正。止_三火血刀_一達_三三善道_一。次修_三禪定_一止_三欲散網_一。達_三色無色定道_一。次修_三無漏_一止_三三界獄_一。達_三涅槃道_一。次修_三慈悲_一止_三於自証_一。達_三菩薩道_一。後修_三実相_一止_三二辺偏_一。達_三常住道_一。是_為初淺後深。漸次止観相。

とあり、「輔行」にいう如く、帰戒、禪定、無漏、慈悲、実相と次第修行するのである。文に添って数えれば、一帰戒に六、二禪定、三無漏に三、四慈悲、五実相の十二となるはずで、無漏を四と数える必要があるのかというのが第一の問題である。

「輔行」には続いて、

漸中即有二十二不同。如前分別。兩教二乘是無漏四。而今乃云無漏總中三者何耶。別而言之離為四人。若總名無漏則合却三人。但存一位。今拳總合開一中兼三。故名無漏總中三也。若没本位離開為四。并善惡各三及以禪定慈悲各一。故成十二。

ともいうが、なぜ無漏總中三というか説明出来ていゝとは到底思えない。これ又、数があわないが、次の

九不同者於前十二合三無漏依總為一。故但有九。并不定四故有二十三。

の方が説得力を持つようではある。「止觀」に、

漸次中九不同。不定中四不同。總有二十三不同。從多為言故名不同耳。

とあるを解釈したものであり、一掃戒に六、二禪定、三無漏を一、四慈悲、五実相を数えないの九と解しているのであり、湛然の理論の中で、無漏が四でなければならぬことを説明していると受け取れるのである。

湛然は又「搜要記」の中で、

此中番数有五。義則十三。言五番者。一掃戒二禪定三無漏四慈悲五実相。義十三者。於初番中善惡各三。第三有。即兩二乘。并及余三。即十三也。於二十三中。実相是三人共所緣理。故不得為三不同之限。故下問答中。云漸次中有二十二不同。

といひ、実相を数えない理由を、漸次・不定・円頓の人が同

『無漏總中三』をめぐる(坂本)

じく縁する理であるからと明了にするのである。

次に「輔行」に他説をあげ、

有人云。無漏總中三者即三觀也。無漏空也。總假。中中。自濫參聽衆有逾一紀。実未曾聞有斯異釈。中即実相実相是同。如何數為三不同之限。一不可也。一宗教門文無説假以為縁者。二不可也。漸次九中已有無漏。慈悲与假其義又同。不応三重數以三足九。三不可也。借使以三足善惡六但成九。今云十二。四不可也。縱兼実相但成二十。今云二十二。五不可也。又第二本文無無漏總中之言亦云二十二。今以此三配於三觀。復含漸次。亦但十二。六不可也。或云諸番違即是觀。止即是止者。三途何故但止無觀。常住何故但觀無止。借使以此為止觀者中間四番四止四觀。初後二番一止一觀。則但有十。若開善惡各立止觀。則九不同十八止觀。若數常住復為現文。文云漸九。七不可也。

七の不可なる点を数え批判する。この中、止觀の第二本には無漏總中之言が無かつたというは注目に値しよう。ところでここにいる有人とは、道邃の「止觀纂義」によれば、

有人云。無漏總中即三觀者。雲法師常在座下。聞闍梨講。至此文時。立此義也。自參聽衆逾二十一年。不曾聞此異釈。汝何作是言。雖聞訓化。堅執不移。故作十不可。更顯其非。今一紀即十一年也。但成九者。彼師云。善惡各三。即六不同。禪定是二乘行。慈悲是菩薩行。開三乘為一。即成十二。

『無漏總中三』をめぐって（坂 本）

今難意。二乗無漏行与レ空同。菩薩慈悲行。与レ仮同。仮使以三三觀足レ六。但成レ八。別不レ成三十二。以レ彼師義。即難不レ成也。中間四番者。彼師云。漸次中六番。一掃戒。二禪定。三無漏。四慈悲。五実相。六常住道。中間即禪等四。初後即掃戒及常住也。今順三師破可レ知。

とあり、石鼓寺智雲ということになる。智雲には止觀の注疏が現存せず、確かめることは出来ないが、無漏を空、總を仮、中を中と三觀に配当するのであり、又、一掃戒に六、二禪定に二、三無漏を一、四慈悲、五実相、六常住道の十二と数えるのである。

仮は慈悲であり、中は実相であつて重ねて数えるのはおかしいという湛然の批判は的はずれかもしれない。無漏を一に数えているのであるが故に。これは又「助覽」にも、

若案レ文判レ失。如レ此記下文云。有人云。無漏總中三者。即三觀也。無漏空也。總仮。中中。自濫參聽衆一有レ逾一紀。未會聞レ有レ斯異釈。中即実相。実有是同。如何數為三不同之限。共有三七不可^三。

と記される。

次に道邃の異説は「止觀記中異義」に見えるところで、

序中云三無漏總中三者。記家意易レ知。和尚云。將三界為三。即所止。無漏為一。即能止。從前次修三無漏止三界獄中上來。故用三界為三。無漏為一。合為四也。

というのである。即ち所止の三界を三となし、能止の無漏を一となすというのである。しかし三界と無漏を合して四となすというは不可解といふべきか。湛然と同じく無漏を四として数えたのであろう。「指要鈔詳解」に道邃を評して、今云三止觀和尚。即邃師也。乾淑僧名。有文三集。抄録邃師所釈止觀異義。邃師暗於止觀之義。多有異見。与荊溪所釈相違。如積三止觀無漏總中三。謂於三界有漏法上。証於無漏。というのである。

ところで、六道に輪廻するものが持戒よりはじめ、禪定に入り三界を脱し、無漏に入り、大乘仏教の思想によれば、——特に法華に於ては——無漏より化他に出て仏道を行ずるのであり、止觀にも「無漏の心を發して、二乗の道を行ずるなり。」という如く、無漏の語の指すところは、二乗でも、又三界を脱するところでも、大きく誤っているわけではなからう。

次に円珍（814～891）の「止觀科節」を見るに、

無漏總中三。此段文古今共難。輔行四紙積兼破^{頭九疑}古九^{七字}不可。講者叙述甚自煩闢。昨尋^疑本文。文近在^疑前。止火血刀^疑達三善道。次修禪定。次修無漏。次修慈悲。次修実相。此文是也。無漏若合但有九。無漏若開^疑兩教二乘^疑成^疑四即十二。不定四取^疑体中四^疑。或指世界下總四或字是四句。意謂^疑実相難^疑解^疑籍^疑漸次不定^疑導^疑進其心^疑。便有^疑九句十三句階級^疑。然後方達^疑実相^疑。故有^疑。

此三種止觀也。

といい、古今の難解な箇所としていのであるが、湛然の説を受けたものである。後半の不定の四の説明は「止觀纂義」とは異なる。「纂義」には、

論漸次中九不定中四者。於三十二中。合三無漏。為一成九。即為五番。一掃戒。二禪定。三無漏。四慈悲。五実相。約此五番。互論淺深。成三不定。以第五番。不為不同之限。故云三不定四。

と、一掃戒、二禪定、三無漏、四慈悲を数えるが、「科節」の体中四は何を指すか不明というほかない。

次に証真的「止觀私記」には、

文無漏摠中三者。決意云。無漏開四以一為摠。余三為三也。問。若無漏開四者。但応云無漏中四。何以一為摠更別列余三。応思。又記中異義云。將三界為三。即所止。無漏為一。即能止。次修無漏止三界獄中来。故用三界為三。無漏為一。合為四也。上問。善惡各三。及禪定即是三界。何重拏三界為三十二耶。又山王院云。無漏者兩教二乘也。摠中三者謂禪定。慈悲。実相也。不別開故名摠中之三耳。合有三十三。而除実相。故云三十二。乾記未明。上問。既皆取摠三。無所除法。応云摠三。不可云摠中三也。或一解云。摠中三者三教菩薩也。禪定。慈悲。実相並名為摠。慈悲在中。而開三。故名摠中三。無漏即二乘。即諦縁觀不分三巧拙。巧拙在於三善

薩故。

と記す。「輔行」の説に疑問を出し、応思と割注のみし、答を書いていないのはどんな意味を持つのであろうか。

又山王院(円珍)の説を出すが、「止觀科節」とは異なる。總中三を禪定、慈悲、実相にあてるのである。即ち五段の中、善惡(掃戒)無漏を別出し、他の三(禪定、慈悲、実相)は開くことなく一として数えるという意味のようである。更に一解として、三教の菩薩にあてて説を出す。ここでも禪定、慈悲、実相は開くことがないから總というのであり、慈悲はその中にあるから中であり、無漏が二乗、慈悲が三教の菩薩ということのようである。

次に尊舜の「止觀見聞添註」を見るに、

七十四。尋云。漸次止觀五差階級相何如。答云。先掃戒者。仏法初門修行法軌。必以持三掃五戒為根本一也。持之自出三惡火血刀。而住三人中天上勝妙果報也。止云一之先修掃戒。翻邪向正。止火血刀達三善道。上次禪定者。修色無色四支五支禪定治欲界散妄二也。是猶有漏禪定故。修二乘空無漏運三界出離觀。号第三無漏一也。是又孤調解脫。起菩薩廣大慈悲。向遍度一切衆生。云第四慈悲也。是三教菩薩慈悲。尚非正意。故修円融法界觀惠。本三諦即是修行。以云第五実相一也。漸次止觀行者所期是円頓也。然中間助行用四差方便一也。

『無漏總中三』をめぐって(坂本)

という。無漏總中三に直接ふれていないが、よくまとまっていると思う。又この後に、七方便位を説く中、

無漏一乘聖道者。小乗有三聖道。謂見得。修道。無學道也。是名三無漏位。初見道有三二人。隨信行。隨法行也。次修道有三二人。信解。見得。身証也。後無學道有三二人。時解脫。不時解脫也。是名三七聖位。

と三聖道をいうのである。これが當を得ているように思われるのである。

次に普寂の「復真鈔」をみると、

然同而不至故名不定^{九左} 一答。漸次所觀有十二境。於此十二。

次第漸修名為漸次。前後淺深更互不定。名為不定。雖同以三実相^一為三所帰。同名止觀。所觀行相頗有異同。故立別名。

言善惡各三者。謂帰戒能止三惡生三善故為六。私記所釈迂矣可^レ知。無漏總中三者。輔行云云。不^レ允。私記中出多異說。

記中異義云云。統紀八三指要詳解一下^{九十五}云云。寂曰。諸說並似不^レ允^二文旨^一。今試辨^レ之。無漏雖^一。所斷三界異故。於能斷

道二分爲三種。或可^レ以見修無學三道。如次當三無漏根。總中三者。即指禪慈悲実相。十二不^レ同。文旨炳然。記主爲十三之

积。恐不^レ應理。諸說率爲十三。除^二去実相^一之辨。甚失^二道理^一可^レ督。故名下恐脫^二漸次二字^一乎。輔行釈意。似^二故名下有漸次二字^一可^レ考。

此章同大至名同耳 第二問答。此問答相同^二初番意趣^一。旧本止觀序正各分^二五科^一。序科第三。銘曰^二辨差^一。今仍循^レ旧立^レ問。然此

問同^レ上。將^レ同問^レ異在文分明。輔行云^レ將^レ異問^レ異者何耶。答中云漸次九者。蓋乃以三善止三惡。合^レ六為^レ三。縮^二前十二^一以爲^レ九耳。輔行云云。應^レ思。不定四者。即指^二上前漸後頓更前更後等四^一也。

とある。「輔行」を否定し、「私記」「記中異義」「統紀八」「指要詳解」など前述の諸説を指処するが、すべてあたらずとしりぞけ、三界を斷するに能斷道を三種わけるか、或いは見道、修道、無學道の三道とするのであるが、總中三とは禪定、慈悲、実相を指すともいう。

又漸次九については、善の三、惡の三を合わせて三と数え、禪定、無漏の三、慈悲、実相と九に数えるというのである。

さて無漏について、智顗は「法界次第」に、

三無漏根初門第三十八

一未知欲知根 二知根 三知已根

次三解脫門而弁三無漏根者。解脫既是涅槃之門。若善修三解脫。

必定究竟無漏。証有余涅槃。得有余涅槃。自有三道不同。謂見

道。修道。無學道也。証三道時。必究三根故。次三解脫而弁之。

通名根者。根以住立能生為義。得此三法。住立不退。生真智照。

故名根也

一未知欲知根 無漏九根和合。信行法人。於見諦道中。名未知

欲知根。所謂九根者。信根精進根念根定根慧根喜根樂根捨根意根

也

二知根 信解見得人。思惟道中。是九根軀名知根。九根如未知欲知根中分別

三知已根 若至無學道中。是九根軀。名知已根。九亦如未知欲知根中分別也

と三無漏根を出す。見道、修道、無學道も同じ問題である。

教理書であるが、智顗の親撰「四教義」には、

二明七聖位者。一隨信行。二隨法行。三信解。四見得。五身証。

六時解脫羅漢。七不時解脫羅漢。此七位通名聖者。以正為義。即

練道懸鏡也。苦忍真明捨凡夫性。得入聖人性。真智見理斷於同類

之礙。故名為聖。此七聖人復有二種不同。謂學無學。前五種聖人悉是學人。後二種聖人是無學位也。

と七聖位を學と無學位に分け、更に、

復就七聖之位。分為三道。所謂見道修道無學道。一見道者。即是八正道。見理斷見諦惑。至十五心。如破石方便也。二修道者。即是七覺分隨觀一諦所斷思惟。如斷藕根絲方便也。三無學道者。如前分別也。

と見道、修道、無學道に分けるのである。

又慧遠の「大乘義章」には、

三漏義

言三漏者。一切煩惱流注不絕。其猶瘡漏故名為漏。故經說為諸漏瘡疣。漏別不同。一門說三。三名是何。所謂欲漏有漏無明漏。如

『無漏總中三』をめぐって(坂本)

雜心云。欲界地中一切煩惱。唯除無明說為欲漏。上二界中一切煩惱。唯除無明說為有漏。外道謂彼色無色界是其結尽無漏涅槃。對除彼見故。說為有三界無明。名無明漏。問曰。何故三界無明合為一漏。以彼無明迷理之心。理相平等。不可別分。故能迷心從之說一。又問。四流四縛等中。皆說其見。何故漏中不說見漏。雜心釈言。連注之義。是其漏義。見心捷疾。於連注義。不相順故。不說見漏。雖不別說。當知。攝在前二漏中。然此三漏。通攝二輪一切煩惱。三漏之義。略述如此

と欲漏、有漏、無明漏の三漏を数えるのであり、又、

別相三道義三門分別別相三一定位二辨相三

別相三道出地經論。亦得名為位別三道。名字是何。一見。二修。

三無功用。初言見者。慧心推求明白名見。進習名修。修心久純任

運上昇息於緣務名無功用。此之三種諸地不同。名之為別。別行体

狀目之為相。即此三行虛通名道。此三分異。是故亦名位別三道。

名字如是此一名門竟

と見道、修道、無功用道の三道を数える。

これらに依れば、少くとも聖位、無漏を三に分けることは、隋代にあって当然のことなのであり、湛然がなぜ無漏を四としたかを考えてみる必要があるであろうである。

漸次止観であるところの「次第禪門」を見るに、大段第七修証章の科文は、

『無漏総中三』をめぐって（坂本）

七釈禪波羅蜜証修四

初修証世間禪相三

初四禪

二四無量心

三四無色定

初六妙門

二十六特勝

三修証出世間禪相二

初対治無漏九

初九想

二八念

三十想

四八背捨

五八勝処

六十一切処

七九次第定

鍊八師子奮迅三昧

九超越三昧

二縁理無

四修証非世間非出世間禪相

第五卷

第六卷

第七卷

第八卷

第九卷

第十卷

観法不壊

観法壊

薫

修

第十卷

第十卷

第十卷

第十卷

第十卷

第十卷

第2

という如く、対治無漏と縁理無漏、行行と慧行に分けて考えているのである。

あるいは湛然はこれに引かれて、即ち事と理であるが故に、藏教と通教の二乗と考えたのではなからうか。

總中の二字（三教に通じての意と考えられそうではある）が解決できたわけではないが、一応無漏を三と数えてみたらどうであろうかという私見を示して結びとする。

1 「摩訶止観」卷一上 (T. 46, p. 1-c)。

2 「輔行伝弘決」卷一之二 (T. 46, p. 150-a)。

3 「摩訶止観」卷一上 (T. 46, p. 1-c)。

4 「輔行伝弘決」卷一之二 (T. 46, p. 150-c) 文中の三人とは三乗かと思われるが、とすれば四人とする理由が説明つくまい。

5 「輔行伝弘決」卷一之二 (T. 46, p. 151-a)。

6 「摩訶止観」卷一上 (T. 46, p. 1-c)。

7 「止観輔行搜要記」卷一 (〔叢書 99, 228-下〕「搜要記」は湛然の作ではなく、弟子のものと考えた方がよさそうである。

8 「輔行伝弘決」卷一之二 (T. 46, p. 151-b)。

9 「止観纂義」卷一 (〔叢書 37, p. 7-b〕「纂義」には日本選述説もあるが、今は中国選述として考える。「止観纂義」は無漏

總中三に関して、湛然を受け、

論無漏總中三者。理実無漏有レ四。即両教二乗。今以レ一摂レ總。

となつてゐる。又第四詮次章には、

今明無漏禪次第相。即有二意不同。一者行行次第。二者慧行次第。

以三別對レ總。故云レ二也。論凡十二不同者。文略。応レ云漸次中六。所謂善惡各三。禪定無漏四。并慈悲凡十二不同。更不取実相。是三人共所縁理故。不レ得レ為ニ不同之限也。といふ。ここでも三別は三乘であるうか。尚「異義」の説と異なる点も問題として残ろう。

10 「止観助覽」卷一 (T. 99, 464-下)。

11 「止観記中異義」 (T. 99, 218-上)。

12 「十不二門指要鈔詳解」卷一 (T. 99, 381-下)。

13 「止観科節」 (T. 99, 37, p. 1-c) 続藏本は目錄に法藏撰とするが、これは誤りである。しかし円珍撰とするにも疑問は残るようである。

14 「止観纂義」卷一 (Z. 37, p. 7-b)。

15 「止観私記」卷一本 (Z. 37, p. 58-b)。

16 「止観見聞添註」卷一中 (Z. 37, p. 248-a)。

17 「止観見聞添註」卷一中 (Z. 37, p. 248-c)。

18 「止観復真鈔」卷一 (Z. 38, p. 3-b)。

19 「仏祖統紀」卷八 道遂伝、

述曰。指要斥日本乾淑所録遂和上止観中異義。以ニ三界一為ニ無漏總中三者上。竊詳遂師親受ニ止観於荆溪。無縁輒創ニ此説。特乾淑輩為ニ此私義。託ニ遂師一以行ニ之耳。(T. 46, p. 683-b)とあるを指す。

20 「法界次第」卷中下 (T. 46, p. 683-b)。

21 「四教義」卷六 (T. 46, p. 739-a)。

22 「四教義」卷六 (T. 46, p. 739-a)。

23 「大乘義章」卷五 (T. 44, p. 566-a)。

『無漏總中三』をめぐって (坂本)

24 「大乘義章」卷十 (T. 44, p. 672-c)。

25 「次第禪門」序 (T. 46, p. 475-b)。

26 「次第禪門」卷一下 (T. 46, p. 480-b)。

27 三藏教は界内の事教、通教は界内の理教という。

(叡山学院助教授)

新刊紹介

壬生台舜博士頌寿記念

「仏教の歴史と思想」

A 5判・本文一〇八二頁・定価二五〇〇円
大蔵出版・昭和六十年二月一日刊